

映画はベルイマンにつける、とはおもっているのだが、若いころはパズリーニにぞっこんだったし、50を過ぎるころからはカウリスマキの良さがわかってきた。(最近、カウリスマキの映画はジム・ジャームツシュと近似点があるようにおもいだした。映画に詳しい人はどうだろう)

先日、BS12というマイナーなBS放送でフィンランドの映画監督アキ・カウリスマキの『ル・アーヴルの靴みがき』(2011年。フィンランド・フランス・ドイツ)を見た。彼の映画は2006年の『街のあかり』以降見るチャンスがなかったのでささやかな幸運を得た。

高知にいるとなかなかカウリスマキの映画を見る機会がなく、美術館ホールで何本か見て、それから、何年か前NHKがカウリスマキの映画を特集で8本ぐらいやってくれたのやら、レンタルビデオ店で借りてみたぐらいで、全作品の半分ぐらいしか見ていないとおもっただが。

カウリスマキの映画の特長は、うまくこの世間を渡っていくことのできない人々、労働者や失業者を描いているのだが、大仰な社会批判や、感情の露出などはなく、いつてみれば映画的な昂揚感はまったくなく、登場人物がどんな状況におちいっても自己嫌悪せずユーモアと機知で(ときにはシニカルに)切り抜けるし、そういう人たちに、最後はいい人生が待っている、といったような人間っていいじゃないか、人生っていいじゃないかとおもわせてくれるぬくもりのある作品がおおい。それになんといつても、間のとりかたに特長がある。セリフの間、もそうだが、表情の間が独特であるし、彼の映画はそ

とおもっていた警部の機知で少年は無事イギリスへ密航していくことになる。

こんな場面、普通の映画だったらご都合主義だとおもってしまいが、カウリスマキの映画を永年見ていると、「それがカウリスマキだ」と、ぼんやりと説得させられる。このぼんやりさがカウリスマキの特長で、ストーリーの展開上、むりやりあつたことをなかつたことにしてしまう場合、普通の監督の場合は、よけいな言葉やよぶんな演技でさもしい画面をつくってしまうのだが、カウリスマキはなんのてらいもなく、さも、観客のきみたちが誤読をしていたんだよ、とでもいうように黒を白にしてしまう。そこらへんのカウリスマキふうの描き方は実際の映画を見ないとわかってもらえないとおもう。

そしてもうひとつ普通の映画だったらご都合主義だとおもわれるシーンが最後の最後に出てくる。ガンで死を宣告されていた奥さんがガンが消えて回復するハッピーなシーンだ。こういう幸運はときとしておとずれるのだ。そこにはカウリスマキ独特の人生観が語られているとおもう。人生、そうたいして悪いことばかりじゃない。ときにはつまづいたり哀しいこともおこるが、それでもいま自分のことをやっていけばなんとかなるだろう、と。

こんなふうなストーリーとか、彼独特の「間」の話とか、ここで書いてみても伝わらないのはわかっているので、たぶんDVDがあるとおもっただが、映画に興味のある人は是非見てください。

この映画の数日前、新聞に「分かり合うことの難しさ」と題

の「間」でもっているようなところがある。といつてもその良さを文章にすることはできないが。

カウリスマキの映画は見る者を極端な絶望や悲観においやるものではなく、すこしく生への希望を、たとえ、その希望が唐突な曲線を描いたとしても、生への希望をもつことを、生への希望を持つことで生への希望が生まれくる、ということを通じている。それは、ぼくのペシミズム、シニシズムにも、ほほう、そういう幸福な逆転もありうるのだな」と軽いボディブローをかますものである。

いつもはフィンランドで撮影しているが今回は、ドーバー海峡を挟んでイギリスと面しているノルマンディのちいさな町ル・アーヴルが舞台だった。(イギリスへの密航が背景にあるからフィンランドでは話があわなかったのだろう)

その町で靴磨きをしている中年の男マルセルが、アフリカからの不法移民の少年をかくまい、近所の住人のささやかな援助を受けながら、母親のいるイギリスへ渡航させる話だ。そのなかでマルセルの妻がガン宣告を受けるのだが、マルセルは妻の病状を気遣いながらも(妻もマルセルのことをおもんばかってガンのことはひた隠しにする)少年のイギリス行きに奔走する。この黒人少年の存在感がまたいい。こういう少年を探しだしてくるのも監督の腕のひとつだろう、登場人物の存在感の良し悪しで映画の90パーセントは決まってしまうのだから。

違法移民を追いかける警部が執拗にマルセルを付け狙うが、最後の最後、少年が警察に捕まろうとするとき、いままで敵だ

して、小栗康平監督(彼の第一作『泥の河』は泣けるような映画だった)の『死の棘』のアメリカでの上映でのときの話題が載っていて、『死の棘』は島尾敏雄原作で浮気を知った妻が夫をなじり、次第に精神のバランスを崩していく話で、その深刻な夫婦の会話、というか諍いの場面で、ニューヨークの観客は、くすくす笑いをしていた、という記事で、アメリカ人は、居心地がわるいと感じたとき、笑うことがあるかもしれない、とアメリカの大学教授が語っているという記事だったが、それはすこし分かるような気がした。最近その映画をやはりBS12で見たのだが、幕開きから暗くて陰惨で憂鬱で、夫の浮気を妻が責めつづけるのだが、見ていると、なんのリアリティも感じず、岸部一徳と松坂慶子の演技はあまりにも型にはまりすぎて、セリフと、役柄だけが強調されて、クスクス笑いではないが、苦笑いのような感情に襲われたことをおもいだした。

そのくすくす笑いを受けて小栗康平は「本質的には笑ってほしい映画なんだ。実は原作も、単純なリアリズムの底が抜けて、滑稽な地点までいつている」などと語っているが、それはどうだろう。猶予だ。

(島尾敏雄には若いころ会ったことがある。当時高知でやっていた小説の同人雑誌の主宰者が島尾敏雄と特攻隊仲間ということで高知に来た。7、8人ばかりの小さな歓迎の席の末席に附録のように座っていただけだったが。映画のなかの岸部一徳は気張れば気張るほど滑稽な顔になってしまっただが、記憶のなかの島尾敏雄は気むずかしそうな顔つきを終始崩さず、会話も弾まなかった)

そのこともそうだが、その欄でもっと興味を惹かれたのは「翻訳」ということだ。映画の冒頭、「おまえ、などと言ってもらいたくありません。あなたさま、と言いなさい」というセリフがある（こういうセリフを聞くと、つい苦笑したくなるのだが）。このセリフが英語の字幕では、「おまえ」は「Hey」、「あなたさま」は「My dear」になっていたという。ぼくは英語のニュアンスなんかわからないのだが、その英語に無知なぼくでさえ「Hey」や「My dear」は「ちょっと違うな」とおもってしまった。そんなことをおもってアキ・カウリスマキの映画を見ていると（いつもはフィンランド語だが今回はフランス語）、彼の映画はセリフが少なく、ぶっさらばうに、言葉を吐き出す、言葉を呟く、そんな感じのセリフが多いのだが、そうなると翻訳もけっこう難しいのではないかとおもってしまう。簡単な言葉ほどそのニュアンスを伝えるのは難しいだろうことはわかる。詩を書いていても、屁理屈で言葉を書きつくせば、まあだいたい言いたいことは伝わるが、それでは詩にならない。カウリスマキのように言葉にも「間」を持たせるセリフを聞いていると、日本語の字幕とは違うことを言っているかもしれない、などとおもってしまった。カウリスマキの楽しさが二三割減しているのではないか、とそんなことをおもいながら『ル・アーヴルの靴みがき』を見たことだった。

しかしまあ、字幕は翻訳家の役得というものだろう。この世間、役得のひとつもなけりやおもしろくないだろう。